
ハサミと定規

春日戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハサミと定規

【Nコード】

N5049P

【作者名】

春日戸

【あらすじ】

人付き合いの苦手な天才少女、鳴瀬は変わった感性の持ち主。

そんな彼女を気に掛ける同級生、三鷹。

彼らのまったりと、しかし確実に変化していく日々の物語。

〇駅まで徒歩5分という立地に、近くにコンビニ、大型デパート完備。12階建てのマンション【目暮】（めぐれ）、部屋数なんと172+α。その一部屋に、鳴瀬家族が住んでいた。

【AM 4:30】

4LDKの私室にスーっという可愛らしい寝息を阻むように、軽快な音が鳴り響いた。

ピピピピピピピピピピピ

セミダブルのベッド脇に置いてある2つの目覚ましの内の一つが、セツトされた時刻を告げている。

天才少女、なるせ鳴瀬 なるみ成海。

彼女の朝は早い。

もそもぞと這うように、白いシーツの中から手が飛び出した。

「静粛に！」

そして裁判官のような低い声を上げ、目覚まし時計の頭を叩いた。
ピピピピダンッ！ピダン！――

「……………」

暗がりの部屋に、またスーっという寝息が蘇った。

鳴瀬 成海。天才であるがゆえに思いつく作為的行動。

多くの人が、二度寝。つまり一度目を覚ましてから、また眠りに

つく行為が好きである。鳴瀬もまたその一人。だから彼女は考えた。
【早い時刻に目覚ましをセットして一度起きてから、もう一度眠り、起きなければならぬ時刻にセットした目覚ましで起きれば良いのでは】と。

その作戦は見事に的中。

【AM 6:30】

ピー！ダンダン！

「フッ…あと1秒か」

肩まで伸ばした黒髪が四方八方にうねった寝癖の天才少女、鳴瀬成海は目覚ましで鳴る前にすでに覚醒していた。現在の目標は目覚まし音のピーの回数が1回目のときに止めること。すでに彼女の朝はタイミングを図る領域にまで達していた。

彼女の朝はまだ、比較的早い。

何故このような時刻に起きるのか。それはこのようなことわざがあるからだ。

——早起きは三文の得——

もちろん、早く起きたからといって別段お金が舞い込んで来るわけではない。彼女はこの15年間ですでにそれに気づいていた。このことわざを知ったのは小学校3年生。金銭的な得が発生しないことに気づいたのは小学校5年生。実に2年もの間、彼女は探求を続けたのだ。

そして、今の彼女にとっての？得？とは、身支度・朝食・そして登校に要する時間の余裕が持てるということだ。

特に彼女の朝食に掛かる時間は長い。実に40分。

その理由は白飯・焼き魚・味噌汁・野菜スティックという献立もさることながら、それらを口に運び、噛み、嚥下するまでが非常に長いのだ。

母親からの教え、「よく噛んで食べなさい」を忠実に守った結果である。

しかし、そこは天才少女。具体的な噛む回数を幼い頃に母親に聞いていたのだ。

母親はふざけて100回と言っていたが、やはりそこは天才少女。噛んでから飲み込みやすい食感にたどり着くまでの回数を、独自の感覚を頼りに地道な探求をし、32回という数値を導き出していた。如何にそれがオニギリであろうと、玉子焼きであろうと、パンであろうと、センベイであろうと、ゴムのようだと云われる固いステーキであろうと、噛めるものは全て32回噛んで食べる。それが彼女の鉄則なのだ。

「お母さん。今日のしめじのお味噌汁は格別ね」

カーテンに吸い込まれた朝の陽射しを浴びるダイニングで、高校の制服に身を包んだ彼女は優雅に語った。前に座る母親は褒められたいにも関わらず、厭きれた表情で、

「もうすぐ電車の時間よ」

といい、人差し指で机をコンコンと叩いていた。自らが口走った失言により、娘がこのような食事スピードになってしまった。だからといって早く飲み込みなさいとは言えない。ただ急かすだけ、しかしこの娘には通用しない。

【AM 7:50】

「行ってきます」

ミルキー色のリュックサックを背負って、鳴瀬は家を出た。

母親は不機嫌に眉を曲げている。それもそのはず、彼女の高校の1時間目の開始時刻は8時30分。このマンションから駅まで5分。電車を待って5分。電車に乗ってU駅に着くまでが10分。U駅から学校まで徒歩で20分。

ギリギリもいいところ。遅刻をするかしないかの瀬戸際。本来、鳴瀬が乗らなければならない電車の時刻は7時38分発なのだ。

6階に位置する部屋から1階に降り、玄関を出ると、地面に1mほどのレンガ造りの四角の枠が横にずらりと並び、その各々の中央に人工林の生えた景色が広がっていた。その木からはミーンミーンというセミのさえずりが聞こえる。そしてそれとは別にジジジジジジジという違うさえずりも聞こえる。

「まだ6月の半ばだというのに、元気な者たちだな」

セミのデュエットに鳴瀬は静かに目を瞑り、満悦の鼻歌で演奏に加わる。

「ふんふんふーん ふんふんふんふーん」

しかし、だからといって立ち止まっているわけではない。天才なのだから当然だ。現時点での目的地である駅まで、淀みなく足を進めているのだ。風趣に富んだ情景に心を完全に奪われたりはしないのだ。

「あら、成海ちゃん。いつもご機嫌ね」

進む方向から聞きなれた妙にトーンが高いが声質の若くない女性から声を掛けられる。自分の世界に浸っていた鳴瀬だが、やはりそこは天才。この陽気で馬鹿に見られるザマをどう繕うかを一瞬の内に脳内で導き出す。

「樋野さんふんふんふーんおはようございまふーん」

慌ててその場に応じた対処をするのではなく、流れに身を任せ、自然に取り込むことで、事なき終える。思惑通り、樋野は鳴瀬が律動的に手足を動かして華麗で美麗に横を通り過ぎるのを二の句を続

けず、そのまま見送った。

「……テンポ、ズレてるわねえ」

鳴瀬が角を曲がったのをいいことに、樋野はボソリと呟いた。

【A M 8 : 0 1】

天才少女、鳴瀬 成海は容姿端麗、温厚篤実、文武両道、質実剛健。そんな彼女のコンプレックスは149cmという身長とBにも満たないバストカップ。直さなければならぬのは負けず嫌いで人を小バカにする性格。それと頑張らなければならないと思っていることは、苦手な長距離走（3キロ）を完走すること。彼女はこれらを13歳の頃から毎年の抱負にしていた。

ガタンゴトン

そんな彼女は現在、電車の中。
揺れに揺られて約1分。

「……！」

鳴瀬の臀部に違和感が。制服の紺色のスカート越しに、手のひらで臀部を撫で回すような感覚が襲ってきた。

（痴漢か…不届きな）

しかし、やはりそこは天才少女。慌てることなく冷静かつ客観的に自分の状況を的確に割り出す。

（3方向につり革に掴まっているスーツ姿の中年男性。一人は広告

を見て、一人は狭いながらも新聞に目を通し、もう一人は寝足りていないのか虚ろな目を擦っている。現段階では、私が痴漢されていることに気づける者はこの中に居ない）

フツと鳴瀬は微笑み、頬に汗を一筋垂らした。

（えつと…だから…、この痴漢を撃退できる者がいないということ、他力本願ではこの状況を打破することはできないということ。つまりところ、己の力でこの最悪な状況に活路を見出さなければならぬ。具体的かつ合法的にそれらに見合った作戦は、私のスカートをたくし上げてパンティー越しにお尻を触ろうとしているこの者の手を取ればいいわけだな）

長々と考え、勇気と気力を振り絞る。しかし、やはりそこは天才少女。この期に及んで、改めて考えを煮え直す。

（いや待て、そんな安直な考えの下、軽率な行動をしてはダメだ。例えば私のお尻をパンティー越しに無造作になでまわしている者が、実は12人家族の大黒柱と考えたらどうだ。私がここでこの者を犯人だと宣告すれば、この者には痴漢をしたという汚名が塗りたくられる。そうなれば勤め先どころか世間にだって見放されてしまう。10人の子どもとお嫁さんの未来を、私が痴漢をされるのが嫌だという名目で闇に閉じてしまうのは如何なものだ。ここは吟味した方が良いのか…？ いや、耐え忍んでいてはこの者が付け上がって活動範囲を拡大させてしまう恐れがある。と、なればある種の引き金つまり私が逃げ出すキツカケをただ待っただけではダメということだ。しかし、どういったキツカケを作り出せば…）

【U駅～U駅～お降りの際は足元にご注意下さい】
好機 キツカケ 到来。

「…！ ここだ！」

やはり天に愛された才を持つ少女。神をも味方につけるこの傲慢さ。鳴瀬はU駅に下車する乗客に紛れ込んで痴漢の魔の手から脱出に成功。

「フツ…私は天に救われ、お前は私に救われたな」

U駅を出る電車を得意げに見つめ、不敵に言う彼女は、痴漢側からすれば正に天女であっただろう。

【AM 8:18】

鳴瀬は駅前のコンビニに居た。

「そういえば今日は新しいペットボトル飲料の発売日だった」

そう呟いてウィンドウケースに容れられたペットボトルの種類を入念にチェックする。

「……」

列ごとにジックリと丁寧に。頭をゆつくりと左右に振り、目線を下にする。しかし、それでも、見落としなど存在しない状況でも、
「…！ ない」

新発売の飲料はなかった。

詰まった声を上げた鳴瀬は、信じられない現実から目を背けるかの如く、奥歯を噛み締めてアイスコーナーに向かっていった。

【A M 8 : 2 3】

鳴瀬は駅から一直線に進むと姿を現す、U市の高等学校に向けて歩き出した。片手にはソフトクリームを持っていて、おいしそうに舐める彼女の姿は、純粹無垢な児童のようだった。周囲の者たちは高校生が悠然とソフトクリームを食べながら登校している姿に、奇異な目を向けていた。

遊歩道が続く長い1本道。忙しなく自転車通学の生徒たちが駆け抜けていく中、鳴瀬は後方から声を掛けられる。

「おい、鳴瀬―」

鳴瀬は呼び声に反応し、肩越しにその者を見る。

「…三鷹^{みたか}か。こんな遅い時刻から登校とはなかなか肝が据わっているな」

上から目線で言った鳴瀬だが、実際の目線の高さからでは三鷹と呼んだ者の胸部辺りしか捉え切れていなかった。しかし、白いママチャリに乗っていることは容易に判断できた。

「フツ…」と荷台つきの自転車を嘲笑うかのように息を吐き出し、少々の敗北感を払拭させる。そして小首を上げ、少年らしい顔つきに、髪に掛かるか否かのショートのを髪を明るめのブラウンに染めた男を視界に捉えた。

この男の名は三鷹^{みたか} 寛^{ゆたか}。

三鷹は鳴瀬の物言いにヌンツと口をへの字にした。

「それはお前のほうだろ。オレは自転車だからまだ余裕あるし…っ

ていうか、何食っちゃってんの!？」

続ける言葉を放り投げ、三鷹は鳴瀬の右手に着目した。

「見てわからないのか。ソフトクリームだ」

当然のように言つてのける鳴瀬に、三鷹は頭をボリボリと掻いた。

「お前なあ…登校中にソフトクリーム食うとか…止せよ」

「フツ、天才にあこがれる気持ちを汲んでやらんこともない。が、この私に意見を申し立てることがどれほど愚行かを知らなさ過ぎるな」

「いや、なんでそれ食ってるのが天才なんだよ」

「感じないのか？ まだ6月の半ばだというのに、この憤りすら覚える暑さを。いくら朝だからといって温暖化の進んだこのご時世だ。油断は禁物。登校中であろつと常に体温に気を配り、快適を保つておかなければ、いつ熱中症に襲われるか分らん。このような些細なことすら軽視しない私を天才と言わずしてなんと呼ぶ」

己の観念に絶対的な自信を持っている成瀬は、酔いしれたように豪語した。

「あー分かつた分かつた。遅刻すつから、ほら、乗れよ」

三鷹は話半分に鳴瀬の語りを耳に入れて、荷台をペシペシと叩いた。

「……まるでタクシーだな」

そう言いながら鳴瀬は荷台に跨ろつと足を少し上げた。なにぶん身長が低いため、ママチャリであろつとなのであろつと、大人用の自転車は彼女には些か背が高い。

乗りづらそうにもたつく鳴瀬を見て、三鷹は微笑んだ。と、同時に声を上げた。

「お、おい。ソフトソフト」

「む？」

右手に持っていたソフトクリームをマイクか何かと勘違いしていたのか、鳴瀬は気の赴くままに右手を下ろしていた。重力によりアイスはボトリと地面に零れ落ちる。

「あーあー…」

単純に注意不足が原因の失態。些細なことにも軽視しないと豪語した矢先の出来事。このままでは三鷹に鼻で笑われ、見下されてしまう。そう思った鳴瀬は、迅速に脳を回転させ、一瞬にして名誉を保つ方法を導き出す。

「……知っているか三鷹。ソフトクリームの製法を」

「は？ いや、知らないけど」

「原料の混合・乳化・殺菌・冷却・凍結^{エッジング}という手順を踏んでソフトクリームは完成する。ちなみにこの次の硬化を行えばアイスクリームとなる。恐らくこのソフトクリームはその中の凍結が甘かったのである。正に原料の糖分のようにな。凍結が甘いソフトクリームはすぐに溶けてしまい、バランスを崩しやすくなる。如何に私とて、既製品であるモノの欠点部位を的確に割り出すことは難しい。つまりだ、」

「あー。分かった分かった。鳴瀬が注意散漫で落としたわけじゃなくて、そいつがダメで勝手に落ちたんだろ」

長々と言いつつ訳を連ねられた三鷹は、とりあえず責任の矛先を変えて完結させる方法を取った。

「フツ、その通りだ」

鳴瀬はうんうんと頷きながら「なかなか話が分かるじゃないか」と小声で付け足した。

その小言に三鷹は深いため息をついた。

「鳴瀬はさ、もう少しその…なんていうか自分を棚に上げる性分を直したほうがいいと思うんだ。その口調もそうだけどさ、もっとこう…しおらしくならないか？」

「しおらしく？ つまり諂えと言っているのか？」

「いや、諂うんじゃないくて、もっとこう従順？ にさ」

三鷹の吐いた従順という言葉に、鳴瀬に憤怒の感情が芽生え始め

た。

従順というのは、態度が素直で人に逆らわないことの意。

（三鷹は暗に私にこう言っているのか？ オレに逆らうことをせず、従順な従者のよう…、犬のように尻尾を振り、命令をされれば忠実にそれらをこなし、主の機嫌を取り続けろと。そういつているのか、こいつは！）

怒り奮闘の鳴瀬は拳をギュッと握り締めた。

「私が貴様の理想を孕んだ女のようになったらどうだというんだ！」

「え？」

物凄い形相で突然声を荒げた鳴瀬に、三鷹は少々の静止を余儀なくされた。

（えーっと…なんで喧嘩越しか分からないけど、鳴瀬が言ってることは…私が従順になったらオレはどう思う？ ってこと？）

思考を展開させ、鳴瀬の言葉を整理した三鷹は、少しばかり頬を赤らめさせて呟いた。

「か……可愛いと思う」

背を向けたまま言明した三鷹に、鳴瀬は機能停止したようにピタリと動きを止めた。そしてプルプルと小刻みに震えだした。

密着している状態のため、その振動は三鷹に伝わっている。

（鳴瀬も恥じらいは持ち合わせているんだな）

三鷹はうぶな反応に、照れくさそうに思った。しかし、そこはやはり鳴瀬 成海。そうは問屋が下ろさないとばかりに。

「…やはり…貴様…その挑戦的な態度は偽りではなかったのか」

赤子の手をひねるように彼の期待を裏切った反応を見せる。

「は？」

見たかは目を丸くした。それに構わず鳴瀬は続ける。

「可愛さ余って憎さ100倍という言葉を知っているか！」

「えっあ？ 知ってるけど…それがなん…って、まさか！」

「よくもぬけぬけと本人を目の前に憎いと言い切るな！ その度胸だけは認めてやる！ しかしまあ、なんとも卑劣で狡猾な男だな三鷹！ こうやって愛想よく私を乗せる厚意は、信頼と親密を築き、私を犬のような従者にするための布石だな！ 私が貴様に気を許し、無防備に背を向けたところにナイフを突き立てる魂胆だな！」

「まてまてまて！ 誤解も行き過ぎたら冤罪だぞ！ ていうかあの会話からどういった経緯で憎いとか犬とかナイフとかに辿り着いたんだ！？」

「ええい、忌々しい！ 貴様の助け舟に些細な疑問も警戒心も抱かなかった自分に腹が立つ！」

質問を一切受け付けず、鳴瀬は怒りに任せてギュツと三鷹の服を力強く掴む。そして喚き散らす。

「下ろせ三鷹！ この軟弱な精神と共に、足にも鞭を与えてやらねば気が済まん！」

「いや、つっても学校もうすぐそこだって！」

鳴瀬はそんな話はどこへやら、グイグイと服を押したり引いたり。そんな行為に三鷹は慌てた。

「おい！ バカ、やめろ、揺らすな！ バランス崩れるって！」

案の定、グラリと大きくバランスを失った自転車は、地面に吸い込まれるように転倒した。

「うわっ！」

ガッシャーン

しかし、そこはやはり男、三鷹 寛。

鳴瀬を傷つけまいと背を抱きかかえ、自分からクッションの役割を担う。

背中を地面に強打した三鷹。

「いつつ」

鳴瀬は下敷き代わりになっている三鷹を見て、ワナワナと震えだした。

「み、三鷹……有言実行とは、侮れん！　このような形で私の背後を取るとは！」

「お、お前な！　助けてもらったつー身の程を知れよ！」

「情けをかけたというのか！？　どれほど私を愚弄すれば気が済むのだ！」

鳴瀬の脳内には「へっへっへ、本来ならあの落下の最中にナイフを取り出してお前の背をぶち刺すことが可能だったんだぜよ」と憎らしいほど顔を潰して笑う誇らしげな三鷹の映像が流れていた。

そんな中、授業の開始を知らせるチャイムが鳴り響いた。

キンコンカーンコーン……

「やべえ、確定で遅刻じゃねえか！」

三鷹は慌てて上に乗っかる鳴瀬を払いのけて、自転車を起こすと、そのまま押して駆けて行く。

「貴様が急を要する時に大胆な宣告をするからではないか！」

鳴瀬も並走して走る。

「お前がなんか無駄に勘違いしてるだけじゃねえか！」

「勘違いではない。貴様の深層心理を追究した結果であろう！」

「んな物騒なこと思ってねえよ！」

「思っただけでも言葉に出たということは無意識のうちに、水面下でそのようなことが形成されていた。ということだと分らないか！？」

「言っただけ！　神に誓ってもオレはお前が言ったことは言っただけ！　え！」

「……100万歩譲って三鷹が言っただけとしても、私にはそう

聞こえたぞ！」

「100万歩譲るくらいなら素直に認めるよ！」

そうこう言い争っているうちに、彼らの分岐が訪れる。徒歩通学と自転車通学の運命といえる、校舎南に設置されている下駄箱に直行する道と、校舎北奥に設置されている自転車置き場に向かう道だ。彼らは言わずもがなで二手に分かれ、鳴瀬は足早に上履きに履き替えて1年のクラスがずらりと並ぶ4階に向かうため、階段を駆け上がっていく。が、

「はあ…はあ…校門からここまで全力だったから…体力消耗量が非常に…早い。…フツ、ここはゆつくりと上がっていくか」

途中から手すりを使ってゆったりと上がることを選択する。しかしその矢先、

「何ちゃんたらしてんだ！　いくぞほら！」

すぐに追いついてきた三鷹に背を押され、強制的に階段を駆け上がることを強要される。拒めばいいものの、この遅刻の原因の一部に鳴瀬も含まれているため、あまり強いことが言えない。本来なら愚痴を吐き散らすのが、鳴瀬は体力の残量が少ないため、言い争いで無駄に消耗することは無知のすることだと自分に言い聞かせ、不本意ながらも言いなりに足を動かした。

3階の階段に差し掛かった辺りで、三鷹が悩ましげに言った。

「遅刻の言い訳…どうっすかなあ…」

「ふむ。確か一時限目は国語だったな。事前の範囲説明で教科書の78Pから80Pまでが授業内容と記憶している。確かあの辺りは…」

駆け上がりつつ、鳴瀬は左の人差し指の第二関節あたりの側面を唇に当てて考える。

「よくそんなこと覚えてるな…」

授業が終わると感じたなら、すぐに休憩モードに入り、教科書を閉じる三鷹は、ただただ感心を覚えた。

「フツ…まあ貴様とは出来が違うからな」

「あーはい。そうですか」

憎らしげに言ったところで、二人は4階の床の感触を足裏で捉えた。そこからは南から最北に設置されている1年1組に向かって、走らず、腕を振って早歩きで駆けて行く。

「三鷹、思いついたぞ」

「何が？」

「遅刻のいいわけだ。この策を実行すれば遅刻どころの話でなくなり、自然に教室内に侵入することができるぞ」

なんの根拠も概要も言わずに、自信満々で言う鳴瀬に、信じていない目を向ける三鷹。

「良からぬ事だと思っけど……。どんな作戦だ？」

鳴瀬はその当然の質問に、ニヤリと片頬を持ち上げて公表する。

「名付けて、――」

【A M 8 : 5 7】

朝日が降り注ぐ1年1組。教卓の前には、上品な顔立ち・ウェーブした肩甲骨まである髪、そして赤が基調のアンダーリムの眼鏡をかけた国語教師、柴崎しばさき 政子まさこが教科書を片手で開いて範囲を朗読していた。生徒たちは各々の教科書をつまらなさそうに見ている。

「——と子規は綴られた。次は80pを開いてー」
そんな、なんの変哲もない、ただの授業風景。そしてそれは、柴崎の、至福の一時。

目を伏せ、視線をゆつくりと窓へ向ければ、輝かしい光のイルミネーションが降り注ぐ。それを埃だなんだと言う気は毛頭ない。ただ美しい。その粒子が渦を巻くよう微動している様。その中に溶け込む生徒たち。まるで絵画。一枚の生きた絵画。それがこの日照りの良い朝の授業で、見ることが出来るのだ。

薄いピンクの口紅で憂いを帯びた唇を開き、静かに、なだめるかのように、はたまた謳うかのように、柴崎は教科書を朗読する。

「芭蕉の句には……」

ガラララッダッッ！

その静かな空間に扉を思い切り開く騒音。柴崎は朗読を中断してその者を見る。いきなりなんだと、叱ってやろうと一瞬思った。が、次の訴えるような叫びに、思考の何もかもが奪われてしまった。扉を開け放った者は、開口一番、大音声でこう叫んだ。

「まさこ……！！」

まるであのCMを模したようなセリフを叫んだ生徒、三鷹 寛。
「なっ……！？」

思いもよらぬところで飛来した、柴崎 政子の為の絶好の無茶振り。

「……………」

だがしかし、授業という勉強を機転に廻る流れの中に、そんな異形物を放り込んでも、クラス内はシツと静まり返り、何が起きているのかという判断の模索に専念してしまう。

つまり、間が空くのだ。その【間】こそ最大の敵。三鷹が勇気を振り絞り、恥を書き捨てて生み出したボケの流れを溶かしてしまう。溶けた流れは死人が生き返らないのと似た道理で、再起動困難。不可能に近い。

ただ皆が押し黙り、三鷹の顔が真っ赤になってゆく単純明快なスベった流れ、場をしらけさせる流れになっている。

そのことに三鷹は予想外だと衝撃を受ける。

（鳴瀬から聞いた筋書きと…違う！）

天才少女、鳴瀬 成海の提案した策略、作戦。

その名も、【ファ。タ再現作戦】

唐突にファ。タのCMを模したシュチュエーションを作り出し、柴崎 政子がそれに乗っかって「今更なによ！」と返してくれれば、この作戦の8割は成功。その流れに乗じて三鷹がクラスに侵入。後に鳴瀬が「この泥棒猫」と言いつつクラスに侵入し、席に腰を下ろす。そうすれば、ノリの良い流れを乱さないようにするため、柴崎はお咎め無しにするだろう。というモノ。

傍から見れば信憑性皆無の無謀な作戦。第一に真面目に授業を進めている中でこのようなことを突然振っても、思考が付いていかない。特に柴崎は【教員】という身の上。下手に授業を中断してそのような猿芝居を打つか？それは当然否。だが、三鷹は信じた。この作戦が成功するであろうことを。それは何故か。とても簡単な理由だ。

天才少女、鳴瀬 成海が自信を持って成功すると断言した。それだけで納得のいくものなのだ。

しかし、思いもよらぬ失敗、鳴瀬の読みの違い、失態により、三鷹は窮地に立たされる。遅刻、いや、この作戦を成功させるために「芭蕉の句には…」というフレーズが読み聞かされるのを扉の前で待っていた20分を合わせると、30分遅れ。すでに欠席扱いだ。その上に授業妨害と来れば、もうこれはお咎めを喰らう確率急上昇。すでにパトランプが鳴り響いている状況。

そんな現実を打ち砕くには、スべった流れを再起動させる他、手立てがない。

流れを蘇生させることはほぼ不可能に近い困難、壁。だが、極稀に蘇る。

——第三者の存在によって！

現在の状況下での第三者とは、この作戦を提案した張本人、鳴瀬のこと。

三鷹に加担してはいるものの、まだクラスに姿を見せていない。それは即ちクラス内には？鳴瀬は欠席？という概念が渦巻いていることに等しい。だからこそ、現状況下に置いて鳴瀬の存在はとてつもなく大きい。三鷹が起こしたことを何も知らない真っ白な人間から放たれる素の反応、言葉により、静止した流れは息を吹き返す可能性を秘めている。

（な、鳴瀬。頼む。アシストを、この凍りついた場を溶かすような、そんな熱風のようなアシストを……！ 頼むッ！）

三鷹は願うようにゆっくりと廊下に目を向けた。先ほどまで扉の前で座りこんで機を伺っていた鳴瀬の方を。

「あれ？」

しかし、三鷹の目には灰色の床だけが、強調されたように、ただそれだけが、飛び込んできた。忽然と姿を消した鳴瀬。命綱だったはずのロープが、途中で切れたような危機感・喪失感が、三鷹の心を徐々に侵食し出す。信じられない目で廊下を見渡すが、それが何かが変わるはずがなかった。念入りに二度繰り返しても、鳴瀬の姿は捉えられない。

ピタリと動きを止めた三鷹は、正に茫然自失の状態に陥った。

「フッ……」

それを見て、ほくそ笑む者が、教室内中央最後部座席に居た。

不敵な笑みを浮かべるのは、鳴瀬 成海だ。

鳴瀬は三鷹の起こした騒動により、視線が全て前方の扉に向かっている状況に乗じて、後方の扉から教室内に侵入していたのだ。初めからそういう作戦。三鷹を犠牲に自分の窮地を脱する。正に傍若無人、悪魔の所業を平然とやってのけたのだ。

静止した中を、柴崎は少しずれた眼鏡を中指で持ち上げ、尖った声で三鷹に申し付ける。

「三鷹くん、座りなさい。15分を超える遅刻は校則により欠席扱いにしますが」

睨み付ける眼光によって、白くなった三鷹に熱が籠った。

「……けっ、どうせ欠席扱いなら授業に出てないのと同じじゃねえか。てことはサボってた方がオレとしては楽だってこと。だから、ふけさせてもらいます」

反抗的な態度で足早に吐き捨てた三鷹は、そのまま扉を閉めて、

廊下を駆けていった。耳まで真っ赤になった顔を、両手で覆い隠して。

（な、鳴瀬のやるおおおお）

ただひたすら、羞恥心と鳴瀬への不満と戦った。

彼は思った。本当に恥ずかしい時、穴があつたら入りたいなんてもんじゃない。自分から掘ってでも入りたいものなのだと。

そんな屈辱を味わった三鷹を尻目に、鳴瀬は柴崎にバレないように気を使いながら教科書を開いた。が、

「鳴瀬さん、あなたも欠席扱いにします」

柴崎の冷徹な声に、鳴瀬は目を見開いて驚愕。

「なっ……」

まさかの、鳴瀬の完璧なる作戦が、露見していた。クラスメイトたちは驚いたように鳴瀬に視線を集中させる。

（どこに穴があつた？ 視線は完全に三鷹の方に。扉を開ける音は三鷹のと同調させて消したはず。現に柴崎先生も私の方を見向きもしていなかった。どうしてそれが……）

グルグルと思考する鳴瀬は、軽い浮遊感を覚えた。それは自信を打ち砕かれた感触だった。

鳴瀬は一筋の汗を頬に垂らして、ギリツと奥歯を噛み締めた。

「何故でしょう？ 私は授業を最初から……」

「あなたね、その座席位置は私からすれば一番目に付く場所なのよ。先程まで空白だったところが埋まっていれば、気づくのは当たり前だよ」

「なるほど……それは盲点だった」

「タイミングからして、さっきのはあなたが三鷹くん……」

柴崎は可哀想だと言わんばかりに廊下側を見つめた。嵌められて恥辱を押し付けられた三鷹が、ノコノコと教室に入ってこられるわけがない。だからこそ、引きとめなかった。本来ならば立场上、無

理強いをしてもサボりを許容するわけにはいかないのだが、人間である以上、あの失態には同情してしまう。

「先生、確たる証拠がないのにそのようなことは口にするものじゃないですよ」

バレバレのモロバレなのだが、こうして強気を装う鳴瀬に、柴崎は頭が痛くなる思いだった。

(…つとにこの娘は…)

「それよりも先生、私も欠席扱いなのであれば、この時間、好きなことをしても宜しいのでしょうか？」

「ダメに決まっているでしょう。授業に参加しているのだからちゃんと受けてもらいます」

「しかし私はこの辺り、すでに予習していて、今更教わる必要性がないと判断しているのですが」

絶対に折れずに反論をし続けますという雰囲気醸し出す鳴瀬に、柴崎は自ら折れることを選ぶ。授業も後半。このような形で時間を浪費するのは勿体無い。早めに決着をつけて授業を再開させなければならぬ。

「…いいでしょう。ただ、条件があります」

しかし、簡単に折れては面目が立たないし、他の生徒にも示しが付かない。

「条件？」

柴崎は黒のコットンバッグからプリントの詰まったクリアケースを取り出し、一枚の小さなプリントを抜き出した。

「これを時間内に満点で提出したら、という条件です」

ピツと鳴瀬が手渡されたプリントは、柴崎がよく復習のために生徒に出題する小テストだった。問題数は決まって10個。1問10点の100点満点の小テストだ。

「…！ フツ、面白いですね。分かりました」

プリントを見て、何かに気づいた鳴瀬は、ほくそ笑みながら筆箱からピンク色のシャープペンシルを取り出して、向かうように書き

出した。

（ふふふ。満点なんて取れっこないわ。あと授業時間18分。悩んで悩んでその全てを使い切りなさい。なんてったって、その小テストは2年生に用意したモノ。1年生で高々2ヶ月しかここ（高校）で過ごしていないのだから、解けなくて当たり前）

悔しがればいいわっ！と柴崎は小首を上げて、教科書を朗読し出した。

【AM 9:05】

順調に授業の軌道に乗り出した頃、ピツと一本の腕が上がった。

「へ？」

挙手したのは、鳴瀬。柴崎はおもむろに腕時計を確認した。小テストを渡してからまだ3分しか経過していない。

「出来ました」

（う、嘘でしょー！？）

10問の問題数と2年生用の問題ということを含わせれば、3分で出来上がるなど考えられない。しかし、自信満々に口の端を広げる鳴瀬からは、冗談とは取れない雰囲気醸し出されている。

「…提出しなさい」

「どうぞ」

「……」

渡された小テストの項目は全て埋まっていた。ゴクリと生唾を飲み込んで、柴崎は教卓で採点を始める。

（ほ、本当に…？ いや、しかし、私は満点と言った。1問でも落としていれば、違う小テストを出題すればいいだけ。まだ予備弾薬（別的小テスト）は2発あるわ！）

そう意気込みながら、採点結果、100を書き終えた。

ゴンッ

柴崎は崩れるように頭を教卓にぶつけた。

（出来とるー！ この娘、あの短時間で満点とつとるー！！）

「フッ…、どうやら満点のようで。これで文句はないですよね？」

鳴瀬の声は、いやらしく、なめるようなものだった。

柴崎は卓上に付いていた手のひらを、土でも掴むようにギュツと握り締めた。そして噛み締めるように、「え…ええ…」とだけ呟いた。

生徒の視線を全て集め、勝ち誇ったように鳴瀬は髪を振って自席へ戻った。

「さて…画期的な二度寝をしたにもかかわらず、朝は妙なことに眠い。少々のうたた寝を堪能させてもらうか」

誰に言うわけでもなく鳴瀬は呟いて、そつと机に伏した。そのすぐ後にムクリと身体を起こして、ポケットから携帯電話を取り出し、電源をOFFにした。そしてまた机に伏した。

【A M 9 : 2 5】

「おい」

野太い声。しかし普通のトーンではなく、無理して作ったような声。

「んん？」

鳴瀬は喉を鳴らして目を開いた。前方には声を掛けてきたであろう人物がいない。右方を見ると、不機嫌そうな面持ちの三鷹が立っていた。

「どこに行ったかと思えば…、なんで悠長にここ（教室）で寝てんだよ！」

「……なんだ、嵌められたことに気づいていないのか」

「鳴瀬がグース力寝てるの見て気づいたわ！ 携帯の電源まで切りやがって！ これは明らかな計画犯罪だ！」

「ふむ、確かに三鷹の自尊心を殺してしまったかもしれないな」

反省の色が見えない鳴瀬の態度に、三鷹は青息吐息だ。

同じ頃、三鷹と同じく自尊心を傷つけられた柴崎は、2時限目に授業を行なう2年4組に移動していた。わざわざ1階の職員室で次の用意をして三階を上るようなことはせず、あらかじめ黒のコットンバッグの中に必要なモノは詰めていた。

不機嫌な足音を鳴らす柴崎は、先の出来事を思い出して、目が据わる。

（……………はっ！ いけない、いけない。生徒たちが不審な目で見ている…。切り替えるのよ、政子。次の教室は比較的やんちゃ者が多いけれど、授業には何の文句も言わずに真面目に受けてくれる子ば

かり。好意的に考えれば聖地に向かうようなものよ。転換するのよ、政子！）

そう言い聞かせて、朗らかな表情を作る柴崎だが、足音だけは変わっていないかった。

【AM 9:33】

授業は始まり、普段どおりに小テストを配り終えた柴崎は、ホッと空いた時間の余裕に胸を撫で下ろした。しかし、

「柴崎先生、小テストが一枚足りませんー」

と女子生徒から文句が漏れた。

「？ そんなはずはないと思うけれど…。正確に人数分の答案をコピーし………！」

言い切る前に、柴崎の片頬が嫌に持ち上がる。そして奥歯を噛み締めた。

「でも、きていませんし…」

油を注ぐように繰り返す、何の罪を持たない生徒に、柴崎は勝手ながらに苛立ちを募らせる。グツと堪えて無理して笑顔を作るものの、それがまた恐ろしかった。

「わ、ワカリマシタ。すぐにコピー、刷ってくるから」

柴崎は走った。走りながら思った。心の中でぶちまけた。

（あいつのせいッ！ 全部あいつのせいッッ！！ 鳴瀬 成海ッ、覚えてなさいッッッ！！）

自分から仕掛けておいて、勝手に憤怒するのはお門違い。なのだが、やり場のない怒りの矛というのは、誰かに向けない限り、刃先の輝きは増すばかりの扱いに非常に困るものなのだ。

歯軋りしながら走る柴崎は、コピーの元となる答案用紙がないことに職員室で気づき、鳴瀬に更なる怒りを燃やした。

北端に教室を置く1年1組、中ではよくある授業風景、テストの返却が行なわれていた。しつこく息を続ける天然パーマのかかった薄い髪、細長い輪郭に顎に無精ひげを

生やした40代半ばの数学教師が、一枚の答案用紙を手にし、生徒に誇らかに言う。

「今回のテスト、満点は一人しかいなかったぞー。平均点は72点だ」

ざわつとする教室に、一人だけ身震いする少女がいた。

「返却はまず満点の、な…ガッツ！

数学教師が頭文字を言った直後、フライング気味に立ち上がる者がいた。

ここぞとばかりにクラスの視線を集めたのは、鳴瀬 成海。

目を閉じたまま立ち上がった鳴瀬は、不敵な笑みを隠さず、得意げにゆつくりと目を開いた。彼女の目には眉を曲げ、唇を尖らせ、頬に汗を一筋流す数学教師が映っている。

「フッ…」

一同がゴクリと息を呑む。その口元から発せられる、満点の名前に。

「な…生天目…」
なまため

「え！ あ、……はい」

「……………」

鳴瀬は隣に席を置く満点を取った生天目という、おさげで丸い眼鏡を掛けたクラスメイトを、なんとも冷酷な目で睨み据えると、静かに腰を下ろして椅子を引いた。

「え…つと、では出席番号順に返却するぞー…」

己から恥を搔いてしまった鳴瀬。しかし、そこはやはり天才少女。一瞬の内に名誉挽回の策を考え付く。

（確か中川という男子がいたな。返却方式が出席番号順なのだから、奴が先に呼ばれる未来は必然。間違いはない。つまり…）

テストの点数を見せ合い、話に盛り上がりをもせてガヤガヤと始めた教室。鳴瀬は集中力を高め、数学教師が発する、あるキーワードを待った。

「えー…次、な…」

好機到来。

（ここだ！）

ガタッ！

鳴瀬は見計らって立ち上がる。先程と同様のシュチュエーションにより、？自分は頭文字に反応して立ち上がったただけ？という概念を、クラスに植えつける。なんとも自然且つ理想的とも言える挽回方法。しかし、天才少女、鳴瀬 成海が考え付いたこの作戦には、最大の盲点、見落としがあった。それは、ガヤガヤガヤ

テストの返却によって賑わいを見せる教室そのもの。他者と話し合っている中で、鳴瀬の取った行動をイチイチ気に留めるわけがない。雑音を耳に入れず、ただ親しい間柄と談笑を交わすだけ。

この策に必要なのは視線、注目を浴びること。全員に？そんなのか？と思わさなければならぬのだ。変わってしまったクラスの状況に、鳴瀬はプクッと河豚のように頬を膨らませて、不機嫌さを誰に対してではないが、おおっぴらに表現した。

その行動を傍目から見ていた廊下側最後部に席を置く三鷹は、「アホだ…」と小声で呟いた。

そうして一人を除いたテスト返却が無事に終了した。

「うーっし。それじゃ、今からそのテストの答え合わせをするぞー」生徒の気だるそうな返事を待たずに、ピツと腕が天を衝くように上がった。

「どうした？ 鳴瀬」

「まだ私の答案が返却されていないようですが」

「ん、あー…職員室に忘れてきたみたいだ。すまんが昼休みか放課

後に取りに来てくれ」

「……では放課後に伺います」

「ん。じゃあ生天目、答案を鳴瀬に見せてやってくれ」

「あ、はい。分かりました」

「くっ、敗北を期した私に対する当て付けか！」

愚痴を吐かれ、ギリリと睨まれた生天目は「えっえっ」と鳴瀬と教師を交互に見合った。

「……気にせず、見せてやってくれ」

そこに助け舟を出す、生天目の横に席を置く三鷹。

「あ。う、うん」

今にも猿のように襲い掛かってきそうな形相をしている鳴瀬の机の上に、生天目は恐る恐る答案を置いた。

「……！」

その所作に鳴瀬の目が見開いた。そしてプルプルと震え出す。机に置いていた両手がギュツと硬く締まった。

「生天目……貴様っ……、満点で確認の必要がないからと、敗者はこの完璧な答案を参考にしろと、暗に私にそう告げているな！」

猿から豹のような鋭い形相に変貌した鳴瀬に、生天目は引き気味に「そ、そんなことは……」と手を横に振って否定する。が、鳴瀬はその行動が、「いや、いいから早くそれ見てひれ伏しなさい」と言っているように見えた。

「いいだろう！ その挑戦、受けて立とう！」

猛攻姿勢の鳴瀬に、生天目は頭を左右に振って「えええっ!？」

と弱い声を上げた。

見かねた三鷹は小声で生天目に。

「生天目の答案、オレに貸して。そんでオレのやつを鳴瀬に渡して」「は、はい」

その提案と三鷹の答案（裏向き）を受け取った生天目は、恐る恐る鳴瀬の机に手を伸ばし、自分の答案を救い上げた。

「なっ！ しかも置いておいて尚も取り上げるといふフェイントも

噛ましてくるだど！？ その大胆不敵な惑略（突発的に出た鳴瀬用語）にはさすがの私も下を巻く！ だがな！」

「ひーん」

鳴瀬の激動の渦の中を、生天目はビクビクと怯えながら必死の思いで三鷹の答案を机に置くことに成功した。

「む！？ なんだこの裏向けの答案と思える代物は」

一応その裏面には【静かにしろ！】と小さく書かれていたのだが、鳴瀬の目には入っていないかつたらしく、すぐに三鷹の答案を捲った。

「三鷹 寛の答案？ 点数は…」

目を右へ動かし、点数を直視する。

「52点？ フツ、平均72点のこの軽いテストで、52点？」

激動はそれを見た瞬間にどこかへ去っていつていた。鳴瀬の片頬は上がりっぱなしで、バカにしたように眉も上がっている。点数的な下を見た途端に落ち着きを取り戻す彼女に、三鷹は「性悪め…」と聞こえないように舌打った。

「フツ…20点はどこに置いてきたのやら」

大人しくなった鳴瀬の表情は、朗らかなものだった。

【PM 12:20】

そうこうして始まつたり終わつたりを繰り返す授業も、一旦の区切り、昼休憩に突入した。

忙しなくバタバタと学生たちが教室内を行き交う。弁当であれ、購買のパンであれ、学生食堂へ行くものであれ、昼食を取ることを目的とし、全員がそれに操られているようだった。

「……」

鳴瀬は一步も動かず、リュックサックからコンビニで事前に買っていたサンドイッチを取り出した。

「なまちゃーん。ご飯食べにいこー」

その横で、生天目を昼食に誘う女子たち。もう一つ横に行けば、
「おい、三鷹。学食食いにいこうぜー」

三鷹を昼食に誘う男子が居た。

生天目はニツコリと笑うと席を外した。しかし、三鷹は座ったままだった。

「ああ。オレはいいよ。パン買って来てるし」

「食堂で食べばいいじゃん」

「いやー何か食堂でパン食うと他のやつの迷惑になってそうだし、
気にしちゃって楽に食えないんだよ」

「こまけーこと気にするんだなー。まあ、気が向いたら来いよ」

男子はそう言つと廊下で待っていたであろう他の者たちと合流して去っていった。

「……………」

一部始終を見て聞いていた鳴瀬は、無言のままホツと安堵の息をついた。

三鷹は「ふう……」と息をついて、カバンからパンを取り出し、食べ始めた。それを横目で確認した鳴瀬は、同じようにサンドイッチを食べ始めた。

（……やっぱこいつ、まだ一人か）

三鷹は半分ほどたいらげた辺りで、鳴瀬をチラリと見て思った。
この2ヶ月ほど、鳴瀬と昼食を共にしようとする者は現れていない。
ずっと一人で昼食を取っている。

一ヶ月近く前に、そのことを気に掛けた三鷹は、帰りしなに自転車の荷台に搭乗している鳴瀬に聞くと、少しだけ押し黙ってから、
強気にこう述べた。

「……私は食べるのが遅いからな。他のモノと談笑しながらでは授業に突入してしまう恐れがある。だから……今のままが一番良いはずなのだ」

そんな強がりの回答に、三鷹は胸に締め付けられる痛みを感じた。

プイツとそつぽを向いた鳴瀬を映す影が、三鷹には切なく見えた。
「…そか」

三鷹は勝手に悲哀を始めた感情を無理やり押し殺して、ギコチなく隠すように微笑んだ。

それ以降、鳴瀬と三鷹はこの会話をしないようになった。暗黙の了解というものだ。

（——こいつ、人付き合い下手だからなあ）

三鷹はパンに目線を戻し、何かを許容したような顔をしてパンをかじった。

（折角の誘いを無下にすると、なんて無駄がましいやつだ）

鳴瀬はそう内で吐き散らす、先程、安堵していた自分が居たことに気づいて、頬を赤らませた。それを隠すように、のそのそとサンドイッチを小さく噛みつつ、三鷹をチラリと見る。

「……………」

お互いに何も話し合わず、ただひたすら、黙々と昼食を取る二人。一方が目線を切ると、もう一方が目線を向けるという、なんとも噛み合わないやり取りが、一席分の空間の中にあつた。そしてその距離が、鳴瀬と三鷹の中では、何故か安心する距離だった。

【PM 3:10】

授業もホームルームも消化し終えて、放課後の時間に突入した。

鳴瀬は小首を上げて黒板の頭上にある丸い掛け時計を見て、はっと思い出す。

「そういえばテストを返してもらわないとな」

ボソリと呟いて教室を出て行った鳴瀬を、三鷹は横目で追った。

「野島先生、テストを受け取りに伺いました」

ガヤガヤと放課後が来ても忙しそう、タバコとコーヒーの匂いが漂う職員室へ訪れた鳴瀬は、窓際にデスクを設けている野島（数学教師）に、淡々と告げた。

「おお。そうだったな。まあ座りなさい」

「？」

テストを受け取ってそのまま帰る手筈だった鳴瀬は、小首を傾げつつも、言われるがままに灰色のオフィスチェアに腰を下ろした。

「初めに言っておこう。先生がテストを忘れたのは、わざとだ」

鳴瀬が座ったと同時に、野島はそう口走った。

「わざと？」

「理由は、不思議な数字が書かれていたことの説明がしたいのと、鳴瀬がこの点数だとショックを受けてしまうと思ったからだ」

「……」

「ほれ」

手渡されたテストの点を見て、鳴瀬は眼球を収縮させた。

「22点……」

「ちなみにクラス内最低得点だ。それよりも、聞きたいことがある」

ショックが拭いきれていない鳴瀬に、怒涛のように続ける野島。

「公式を使った問題があるだろ。そこにどこからきたのか分からん

【6】がそこら中に使われているんだが、なんだこれは？」

鳴瀬は一度キョトンとしてからフツとほくそ笑み、

「愚問ですね」

と一言で区切った。

「ん？」

「このテストが行なわれた日、6月6日。このとき、朝の占いで私のラッキーナンバーは【6】でした。つまり、至る所に6を入れることが私を幸運に導く日だったのですよ」

野島は本気で耳を傾けてしまったことに、後悔を覚えた。

「…ですよじゃない！ この6のせいで公式問題は全滅しているんだぞ！」

「それは致し方のないことです」

「……何でだ」

野島は悩ましく額に手を置いた。

「もし私がこの日に6を書き連ねていなければ…、例えば電車が脱線して死んでいたかもしれません。その回避をしてくれたのが…」

「鳴瀬、知っているか？」

「…？」

管を巻く鳴瀬に見切りをつけた野島は続けようとする話に容喙を刺し、真剣な表情をした。

「6月6日で、ラッキーナンバーが6と言ったな」

「え…ええ」

その真剣すぎる表情から発せられる声に、鳴瀬はゴクリと喉を鳴らした。

「6が3つ。666。これが何を意味しているか、知っているか？」

「？ 6が3つ並ぶことに何か意味があるのですか？」

知識として持ち合わせていない鳴瀬は、疑問を直入に問う。野島は腕を組んで頭を2・3傾かせて、険しい声を出した。

「666はヨハネ黙示録の13章18節に置いて、獣の数字、悪魔の数字とされているんだ」

「なっ！ 悪魔！？」

驚愕の情報に鳴瀬は冷や汗を掻いた。

「そうだ、つまり鳴瀬がこうやって6を書けば書くほど不幸あくまを招来させているんだ。その証拠に！ この22点というクラス内最低得点が出ているだろう！」

「ビシッ！と点数に指を差した野島に、鳴瀬は「た…たしかに！」と声を詰まらせた。そして、両手でしっかりとテストを握って震え出した。

最終的に荒唐無稽になった野島の言い分だが、それを信じて怯える鳴瀬。その子どものような姿に野島は穏やかな笑顔を向けて、優しく告げた。

「だからな、占いに頼らず、自分を信じて解答していくんだぞ」

「はい…」

諭された鳴瀬は、噛み締めるように返事をした。

「野島先生、谷村先生が呼びですよ」

その機を狙ってか、丁度話が完結したと同時に、他の教員が野島を呼んだ。

「あ、はいー分かりましたー。じゃ、鳴瀬、がんばれよ」

足早に話を切って、野島は職員室から出て行った。

「……」

鳴瀬はそれを目で追ってから、答案を見つめ直した。

【PM 3:26】

「6が3つで悪魔の数字か…なんともタメになる話だった」

鳴瀬はブツブツと呟きながら下履きに履き替え、考えるように腕組みをして帰宅道を歩き出した。と、鳴瀬が校門を出たすぐに、三

鷹が自転車に乗ったまま立っていた。

「よう」

「なんだ、まだ居たのか」

「当たり前だろ。オレの会心の52点を嘲笑ったんだ。鳴瀬の点数を聞かないと気が治まらない」

「フツ、他愛ないやつだな」

鳴瀬大ピンチ。点数上では22点vs52点となると30点、2倍以上の差で大敗している。バカにしていた分のツケが、今この場で払われようとしている。

しかし、やはりそこは天才少女、鳴瀬 成海。

こういった場面に陥るであろうことを、事前に予測していたのだ。野島の目がなくなったのを良いことに、点をつけたであろうペンを拝借し、22点の2にそれぞれ1本ずつ線を引いて改竄。表面上でしか点数の良し悪しを判断できない一生徒は、それを鵜呑みにすること必至。

「再起不能なまでに打ち砕いてくれるわ」

鳴瀬は悠々とリュックサックに手をつ込んで、答案を引っ張り出した。そして三鷹の目の前に圧迫感をふんだんに盛り込んで突き出した。

（くっ… やっぱオレより高いのか!？）

背を少し仰け反らせた三鷹はその自信たっぷりの素振りに片奥歯を噛みつつ、受け取った。

三鷹の目に飛び込んできたのは点数の表記は、

「88点ッ!？」

に、見えそうで見えないなんとも不思議な数字。いや、記号か。

「フツ、まあ満点には程遠いだろうが、貴様が及ぶ範疇の数値ではないだろう」

腕を組んで？これぞ皮相浅薄の法!？と胸の内で叫び、ニツと不敵に笑う鳴瀬に、三鷹の我慢は越えた。

「ブツッハッハッハ! なんだこの頭の丸い砂時計みたいな記号は

！書き加えたの丸代わりじゃねえか！」

爆笑の中、臭いものに蓋をした事実を言い当てられた鳴瀬は、「なっ……！」と詰まったような声を出した。

「これ多分、22点だろ。ブブブ、オレの52点様が眩しく見えるなー」

これまでのお返しだといわんばかりの物言いに、鳴瀬はプルプルと震えだした。

「き、貴様……ッ！」

「あ、もしかしてこれ、テルテル坊主のシルエットか？ 明日もいい天気だつて天気予報で言ってたぜ」

答案を太陽に翳して憎らしい顔をする三鷹から、鳴瀬は「返せ！」と怒号を発して答案を奪い取ると、うずくまってリュックサックにしまい込んだ。

「そんな恥ずかしがるなよ。50点置いてきただけだろ？」

妙に同情身のある声に振り向くと、三鷹の頬は膨らんでいた。勝ち誇って欣喜雀躍している姿に、ビキッと鳴瀬の頭の中の何かが切れる音がした。

「フッ……フッ……」

「？」

笑い出した鳴瀬は、リュックサックから筆箱を取り出して、マジックペンをその中から選出した。

「な、何する気だ？」

「愚問も愚問！ 貴様の自転車に悪魔の数字を書き連ねてやるうううっ！」

正気を失い、豪勢にペンを走らせようとする鳴瀬を三鷹が止めに入る前に、

「やめ——！」

キュッキュクッ——！

横一線が走った。

「うわー！ オレのメソポタミアン号になにしゃがる！」

マッドガードに【666】と小さく書かれたのを見て、三鷹はワナワナと雄たけびを上げた。

「フフフツ…これで貴様のメソポタミアン号は呪われ…って、ネーミングセンス悪ッ！」

「うるせえ！ どうしてくれんだよこれ！ 油性ペンで書きやがって！」

「喧嘩を売ってきたのは貴様の方だろう。私はそれを懇切丁寧に購買してやっただけに過ぎん」

「オレの52点をバカにしたのはそっちが先だろう！」

と口走ったところで、三鷹はあることに気づいた。

「…あ、そうか。これが負け犬の遠吠えってやつか」

考えるように顎に手を当て、ニヒルな笑みを浮かべた三鷹を見て、鳴瀬に衝撃が走る。

「……！！」

一瞬のうちに顔面蒼白になった鳴瀬。

「ん？」

そのレバーが切り替わったような変化に、三鷹は疑問を抱いた。

「き、きさ、貴様ッ！ 今朝、宣告したとおりに…事を運んでいたというのか！？」

鳴瀬は信じられないものを見る目を三鷹に当てながら、ジリジリと後方へ下がっていく。

「？」

てつきり怒って喚き散らすかと思っていた三鷹は、そんな予想外の反応にキョトンとして、反応することが出来なかった。

「くっ…く…」

鳴瀬はギリツと歯を食いしばって、何かに耐えているようだった。「貴様の犬になるくらいなら…！」その事、刺し殺して欲しいくらいだ！

鳴瀬には自分の首に掛かっている鎖を三鷹が握って、一段高みから俯瞰している映像が流れていた。そんな見下された状態に憤慨し、

悔しさが体内を波及、全身に力が入る。

「???? な、鳴瀬さん？」

三鷹は鳴瀬の頭の中でどんな妄想が蔓延っているのかまるで分らず、ただ不思議さを増すばかり。

「くっ……今日は色々あつて疲れが溜まっているせいで遅れを取ったが、次からはそうはいかない！ 覚えている！」

突然、三流負け犬の称号ともいえる言い訳を咆哮した鳴瀬は、ダツと三鷹の横を通り過ぎていった。

しかし束の間、これみよがしな不運が鳴瀬を襲った。

ガッ！

「なっ……！」

突然、足が絡まり、地面と身体支える柱がなくなった。前から倒れることが確定した状態。だが、そこはやはり天才少女、通常の間ならばこの状態に陥った場合、無抵抗のまま身をコンクリートに捧げるか、無意識的反射により、どうにか回避しようとする。しかし鳴瀬はこの場合、その最中に、倒れた時の応急処置ともいえる受身の数々を瞬時に脳内に連ねるのだ。

（後方受身・横受身・前受身・前方回転受身・空転受身！）

この間なんと0.3秒にも満たない。が、それが災いした。

（この中で実践的に使えるのは……！前受身か前方回転……！）

さらに絞り込みを掛け始めた脳内検索により、受身の始動が大幅に遅れ、間に合わなくなつたのだ。

「しまっ！」

ベターン！

言い切る前に、鳴瀬は無抵抗のまま豪快に全身をくまなく打つようなこけ方をした。さらにダッシュ後の出来事ということも追加され、少しだけズリツと地面を平行移動した。

「お……おい……」

その姿を見ていた三鷹には、鳴瀬が激しい葛藤を経た結果だということとは露ほども感じられない。ただ憔悴しきつた背中が地面に倒

れているだけだった。

「だ、大丈夫か？」

心配そうに近づきながら聞くと、

「大丈夫に決まっている！」

と鳴瀬は反発するように背を向けたまま立ち上がった。

三鷹はホツと安堵したが、鳴瀬の足が震えていることに気づく。

はあっとため息をして、道路の縁石を見て言った。

「…鳴瀬、ちょっとその縁石に座ろうぜ」

「何故、三鷹に命令されなければならない！」

棘のある返しに三鷹は一度だけムツとするが、すぐに諦めたように頭を掻いて言った。

「…命令じゃなくて、オレからの頼みってことならいいか？」

「ム……」

(…私を見下していたであろう三鷹が下手に出たということは…優劣がまだ確定していないということか?)

鳴瀬は肩越しに三鷹を見つめ、口を尖らせると、恥ずかしそうに

「そういう…ことなら…」と言って、渋々な態度をわざわざ作り、縁石に腰を下ろした。

三鷹はふうつと息を吐き出すと、ポケットから財布を抜き出し、その中から絆創膏を取り出した。

「ほう、三鷹は絆創膏を常日頃から身に付けているのか」

「まあ、こーいうこともあるっちゃあるからな」

三鷹はそういつて鳴瀬の前で膝を折った。

「あー、膝をちつと擦ってるな」

鳴瀬の膝元から滲むように出る血に、痛々しいそうに言った。

「そうなのか？」

鳴瀬はまだ痛みが麻痺している状態のせいか、あまり気に留めていなかったらしく、確認のためにスカートを少し巻くって覗き込むように自身の膝を見始めた。

「!？」

バツ！

三鷹は鳴瀬その行動に対して、すぐさま顔を勢いよく逸らした。その理由は。

（ああああ！！！　なんでオレ、咄嗟に顔を逸らしちゃったんだ！あの隙間から覗かせる黄金比の三角形を！　いや、どちらかというと白色か水色の三角形を何でもっと！　くそ！　自分の反応速度が恨めしい！）

首が振り千切れんばかりに顔を逸らして悔恨の情に駆られる三鷹。しかし、そこはやはり男。

（いや待て！　鳴瀬は気づいていないかもしれない。そうなればオレが顔を戻してもアレはまだ見えるわけで、この目に焼き付けることが可能！　いや、しかし…）

諦めきれない感情が三鷹を導き始めた。脳裏に二つのシルエットが浮き上がった。

白いシルエットと黒いシルエット。

白は言う。

『ここは顔を逸らしたまま注意を促すのです！　見てはいけません！』

黒は言う。

『なにやってんだよ！　早く見直さないと機会がなくなっちまうぜ！　見ろ！　見るんだ！』

『いけません！　見てはいけません！』

『見たって何か減るわけじゃねえ！　見るんだ！』

『もし気づかれたら印象が悪くなりますよ！』

『気づかれないように見ればいいんじゃないか！』

その口論の狭間にいる三鷹は、容喙を刺す。

『静粛に！　三鷹会本会議では、多数決で決議することとする！』

切迫したその雰囲気、ゴクリと生唾を飲み込む白と黒。

目尻をいやらしく下げ、鼻の下を伸ばした三鷹は、高らかに確言する。

『0対1により！！　鳴瀬の輝かしいアレを見るという議案を可決します！！』

カツ！と覚醒したかのように目を見開いた三鷹。

（いくぜ！　オレの全集中力を開放して！　この脳裏に焼き付ける――！！）

グンッ！

三鷹は鳴瀬の局部位を狙い定めて振り向いた。

ベゴ！

鳴瀬の鉄拳が三鷹の頬を陥没させた。

「お…お気づいてしたか」

口が閉じきらない三鷹の呂律は正常に機能していなかった。

「三鷹が顔を逸らしたことでピーンときた」

鳴瀬は頬を赤らめ、気恥ずかしそうに言った。三鷹は数秒前に戻りたいと切なく願った。

鳴瀬は三鷹の頬から拳を離すと訊いた。

「して、三鷹の脳内で始まった天使と悪魔の議論戦は、どちらに軍配が上がったのだ？」

言わずとも分かっているがな！という鳴瀬の威圧的質問に、三鷹は直感的に嘘をつくのは火に油をぶち込む行為に等しいと判断し、口をおぼつかせて素直に答えた。

「た…、多数決方式を取り入れた結果、0対1で悪魔側が可決されました」

「……」

鳴瀬はその言い分を聞き入れ、ニツコリと微笑んで、？多数決にした意味は？？というのを表情で表現すると、三鷹も同じような微笑みに汗を追加させて？あ、あはは。ありませんかねえ…？？？というのを表情で表現した。

「悪魔に魂を売り払いおつて！ 一度目は私の注意不足で起こった不可抗力的なものだったから許容したが、二度目はそうはいかん！ この変態め！」

鳴瀬は自分で絆創膏を傷口に貼り付けると、愚痴を言いながら三鷹から離れていった。

三鷹は縁石に座ってずーんと深く沈んでいた。後悔先に立たず。一度目を許容してくれるといていたのだから、あの時逸らさなければ。天使側の意見を採用していれば。そして変態という汚名をどう返上すればいいのか。

「……」

鳴瀬は程なく進んでから振り返り、小言のように言った。

「……だが、挽回の機会を与えてやらんこともない」
その言葉に三鷹の顔が上がる。

「私は……なんだ……足を痛めているから……その……家まで送ってくれば、今回のことは見逃しても……」

途切れ途切れに言う鳴瀬の背を見て、三鷹はふっと微笑んだ。

「——お安い御用で」

「頼むぞ、タクシー——……」

天才少女、鳴瀬 成海はただでは転ばない。

【PM 4:32】

シャコ……シャコ……

O 駅に向けて出発し、15分ほど経った頃、鳴瀬を乗せたメソポタニアン号666（スリーシックス）を漕ぐ三鷹は、不意に疑問を抱いた。

「……そういえば何か……んー？」

しかしその出処がイマイチ掴めない。何ともやきもきした気持ち

だ。

「どうした？」

「いや、何か違和感がさ……」

「違和感？」

「何だろ、いつの間にか何かが逆転したような……」

鳴瀬は少しだけピンク色に染まっている空を見上げて、「ふむ……」と相槌を打つと、ハッと何かに気がついた。そして背負っているリュックサックに目を当て、何事もなかったかのように言う。

「……………気のせいだろう」

妙な間を空けた後方にいる鳴瀬に、少々の疑問を残しつつ、三鷹は「…そか」といってペダルを強く踏んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5049p/>

ハサミと定規

2010年12月19日16時26分発行